

氏名(本籍)	渡辺清恵 (岡山県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博課第332号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	宣長学の構造とその意義について
論文審査委員	(委員長) 教授 小路田泰直 教授 舘野和己 助教授 西谷地晴美 教授 渡邊和行

論文内容の要旨

18世紀の思想家本居宣長については、しばしばそのとらえどころのなさが議論され、その評価をめぐって百家争鳴の観を呈する。「言語研究においては師弟の意見を取り入れるなど柔軟な姿勢を見せつつも、一方で儒学を批判する時は相手を全く受け入れない頑なな態度をとる」「宣長独特の語り口」や、「多くの文献を引用して「実証的」に『古事記』を研究したにも関わらず、その成果である、いわゆる「古道論」を展開するときは、詩的に古代を語り出す」彼の「多重人格」性に原因があるのかもしれないが、それにしても評価が定まらない(p4)。

ではそのとらえどころのなさを乗り越えて、宣長評価をそれなりに定めるためにはどうしたらいいのか。筆者は「宣長は「合理的な」人間であるはずだ」という先入観が、かえって宣長をわかりにくくしている(p4)。むしろ宣長の頑なさの方こそ注目すべきだ。「今まで非合理的として切り捨てられる感の強かった儒教批判や古道論にこそ、検討し直す要素が含まれている」(p5)と考える。

そこで、宣長の「古道論」を取り上げ、その形成を考えることによって、問われ続けてきた「宣長学とは何か」との問いに、新たな答えを用意しようというのが本研究である。構成は以下の通りである。

序章

第一章 『古事記伝』における宣長の世界観——神代巻を中心に

第一節 道

第二節 神

第三節 理

第二章 本居宣長と市川鶴鳴

第一節 本居宣長の儒教観

第二節 市川鶴鳴の儒教観

第三章 本居宣長の文学論と言語観

第一節 文学論

第二節 言語論

第四章 近世後期における歴史思想と古代——超越的なものの存在をめぐる

第一節 儒学者たちの歴史思想

第二節 本居宣長の歴史思想

終章

明治以来宣長学はどちらかというと、上田万年や中野虎三、芳賀矢一らによって、国語国文の研究を通じて、我が国固有の思想や道徳を明らかにしてきたことにおいて、評価されてきた。

しかし昭和初頭村岡典嗣の研究（『本居宣長』1928年）が登場することによって流れが変わった。宣長学において、その実証的文献学研究と情緒的古道論とは明確に区別され、宣長学の神髄はどちらかというと前者に見出されるようになったのである。村岡は宣長の古道論を宣長学における「変態」と表した。戦時中「あはれ吾々の胸は英米撃滅、大東亜建設の決意に燃える。かうしてここにこの書を上梓するの、その一端のお役にたちたいといふ切なる念願からに外ならぬ」との思いで『本居宣長の研究』（1944年）を書き上げた笹月清美でさえ「宣長の文学研究と古道論の関連については、そのつながりを認めず、次元を異にするもの」（p 7）としていた。そして戦後になると村岡の考え方は一般化した。大久保正や西郷信綱によって受け継がれ、その延長上に、それを「人間性の発見、人間感情の回復」のための学とする宣長学評価が定着した。加藤周一によって指摘された「宣長問題」（宣長における緻密な実証性と狂信的排外主義の共存をどう見るか）なども、だから生じたのである。

しかし1980年代に入ると、再び流れが変わった。むしろ古道論やその皇国主義的主張にこそ宣長学の本質はあるとの考え方が、子安宣邦氏らによって主張され始め、宣長はたちまち皇国主義者、日本中心主義者（ナショナリスト）とのレッテルを貼られる存在になってしまったのである。

しかし果たして宣長の古道論は、単純に皇国主義や日本中心主義のレッテルを貼ってしまっている思想なのだろうか。筆者の問いはそこから始まる。

そこでまず第一章において筆者は、宣長「古道論」の中核『古事記伝』の語る世界観について分析する。

まず、本題に入る前に、「この国では、漢籍について学ぶことが「学問」と呼ばれてきたが、自国

の事柄を学ぶことこそ本来「学問」と呼ばなければならない。漢学は異国の学問であるから自国の学問とは区別して「漢学」と呼ぶべきである」(p13)との宣長の学問観を紹介し、宣長の国学尊重が必ずしも漢学排除ではないことに注意を喚起する。その上で『古事記伝』の『古事記』解釈の特徴を、次のように捉える。この世に存在するあらゆるものを神の作為的な作り物として捉えるところに特徴のある解釈だと。

例えば『古事記』冒頭の「^{アメツチノハジメノトキ}天地初発之時。於^{タカアヲノハラニナリマセルカミノミナハ}高天原成神名。天之御中主神。次^{アメノミナカヌシノカミ}高御産巢日神。^{ツギニタカミムスビノカミ}次^{ツギニカミムスビノカミ}神産巢日神。此^{コノミヤシラノカミハ}三柱神者。並^{ミナヒトリガミニナリマシテ}独成坐而。隱^{ミミツカクシタマヒキ}身也。」との部分について、宣長は「ここは必ずしも「天地」の誕生を指しているのではなく、ただこの世の始まりをだいたい表現している」(p18)に過ぎないという。むしろ天地の成立は次の「^{ツギニタニワカクキアブラノゴトクニシテ}次国稚如浮脂而。久^{クラゲナヌタダヨヘルノトキニ}羅下那洲多陀用幣疏之時。^{アジカビノゴトモニアガルモノニヨリチナリマセルカミノミナハ}如葦牙因萌騰之物而成神名。宇^{ウマシアシカビヒコデノカミ}麻志阿斯訶備比古遲神。次^{ツギニアメノトコタチノカミ}天之常立神。此^{コノフタハシラノカミモヒトリガミナリマシテ}二柱神亦独神成坐而。^{ミミツカクシタマヒキ}隱身也。上^{カミノタダリイフバシラノカミハコトアマツカミ}件五柱神者別天神。」との部分において説明されていると。「浮脂」の如く漂っているものは、将来天地になる、未だ天にも地にもなっていないひとかたまりのもの(一種の混沌)を指し、その中から「葦牙」のようなものが萌えあがったとき、萌えあがったものが「天」になり、残ったものが「地」になったのだと。

ではなぜ、そういったのか。「天地」や「高天原」が誕生する以前に、造化3神(天之御中主神・高御産巢日神・神産巢日神)が誕生していなくてはならないと考えたからであった。逆にいうと「天地」でさえ神が造ったものというためであった。

また「世の中で起こるありとあらゆる悪事、凶事」(p27)の原因を禍津日神(黄泉の国の穢れから成った神)の仕業と見なしているが、それはさらに煎じ詰めれば、それらを伊邪那美命の人を日に千人殺そうという誓い(意思)の結果と見るためであった。しかも伊邪那岐命の、では自分は一日に人を千五百人生もうという対抗的な誓い(意思)によって、その悪事、凶事も最後は吉善に転換するというためであった。その転換の証が、宣長にとっては黄泉の国から帰還した伊邪那岐の褌ぎから天照大神が生まれたことであった。

宣長は、この世界を構成するありとあらゆるものを、神の被造物と見なすために『古事記』を解釈したのである。しかもそういうためには、『古事記』こそ「^{かみ}最上たる^{ふみ}史典」といいながら、あえて、自らその価値を貶めた『日本書紀』の叙述に頼ることも厭わなかったのである。

宣長の『古事記』解釈が、決して純粋に実証的なものでなかったことは明らかであった。それは、この世のすべてを神の被造物とみなすための、強引ともとれる『古事記』解釈だったのである。

ではなぜ宣長はこの世の総てを神の被造物と見なす必要にかられたのか。この世におこるあらゆることが、良きことも悪きことも、神——善神・悪神両方——の意思の賜であると言わんがためであった。それが言い得て初めて彼は、道の人にとっての超越性(絶対性)、その古代——より神代に近い時代——における実在性を言うことができるからであった。以上が第一章の内容である。

そしてこの世にあるものすべてを神の被造物と捉えたから彼は、道を神ではない聖人（どこまでも人）の創造にかかるものとする儒学を厳しく批判したのである。「聖人の道」を「君主を滅ぼし、国を奪った聖人が自分の罪を逃れようとする言い訳」（p38）とか、「聖人が治めがたい国を治めるために作ったものなので、「仁義礼讓孝悌忠信」などといって人々を厳しく教化しようとしているが、それは人の情に適わぬものであり、本当の道ではない」（p38）といった調子である。

当然儒学者との間に激しい論争がわき起こった。その論争の有様を、上田秋成と並ぶ宣長の最大の論敵、上野国高崎の人市川鶴鳴との論争をとりあげ紹介したのが、第二章と第四章である。

筆者によれば最大の論点は、古代認識＝歴史観の問題であった。市川（荻生徂徠の影響を強く受けた儒者）は古代を「洪荒ノ世」と呼び、人間も禽獣と変わらなかった時代と捉えた。だからその古代において聖人が出て、人々に規範＝「道」を与える必要があったと考えたのである。そして古代が「洪荒ノ世」であることは、古今東西を通じて同じだから、中国で生まれた聖人の道は普遍的であり、日本においても有効だと考えたのである。

それに対して宣長は古代を「産巢日神の御霊」によって人為的——神為的と言うべきか——に作られた、したがってよく整った、あえて「道」などということはいわなくても道德の行き届いた社会＝時代と捉えたのである。

むしろ中国から、「治めがたい国」だからこそ生まれた「権謀術数に長けた策略家」（p38）の教え＝「聖人の道」が入ってきたからこそ、この国は中世に入ってから乱れたと考えたのである。

この儒者と宣長の論争の本質を、第二章と第四章で克明に描いている。

しかしそうすると、当然出てくるのは、ではなぜ宣長は、当時支配的であった儒学的道德観と激しくぶつかってまで、「道」を古道に求め、その論拠を、この世の総てのものは神々の作り物だから——それを論証するために彼は『古事記伝』を書いた——、ということに求めたのかとの疑問である。

子安氏などは、近世後半の対外的危機がもたらす、ナショナリズムの高揚に原因を見出すところである。その場合には、宣長の考え方の中心は、儒学の排除それ自体にあったということになる。

しかし筆者はそうには考えない。どこまでも、宣長の思想内部の出来事として捉えようとする。そして『古事記伝』出版以前に宣長が、文学研究や言語研究に大きな足跡を残していたことに注目する。「ここで文学論や、言語説をとり上げるのは、宣長の古道成立の理由を、これまでのように周囲の環境など外部の原因に見るのではなく、宣長自身の思考過程をたどって明らかにする必要があるのではないか」（p51）と筆者は述べている。

宣長は文学研究、言語研究の中で二つのことを発見していた。

一つは、『源氏物語』など優れた文学の中を貫く「もののあはれ」の感情を理解しようとすれば、儒教や仏教の提供する勧善懲惡的な道德論では用をなさないこと。文学を深く理解しようと思えば、「儒仏による価値判断から独立した独自の価値」（p56）の確立が不可欠なことであり、今一つは、日

本語において「てにをは」や係り結びの法則（「本末のととのへ」）は重要だが、それは時代と共に作られてきたものではなくて、「神代から自然と言葉に備わっている「定まり」」（p 59）であって、むしろ時代が進むにつれどんどんと乱れてきたということ、であった。

ならば宣長は「もののあはれ」の感情が横溢しており、言葉の「定まり」がきちっとしていた古い過去に「道」の存在を求めざるをえなくなった。だから宣長は『古事記』の研究に進み、儒教でも仏教でもない古道の発見に努めたのである。これが上記の問いに対する筆者の答えである。

宣長にとって『古事記』は『日本書紀』よりも飾りが少なく簡潔なので、かえって情緒にあふれていて「あはれ」が感じられる」（p 56）作品だったということがその背景にある。

そして以上の分析を踏まえて終章において筆者は、宣長の思想的営みの意図が、決して「『日本イデオロギー』の創始」（p 88）などにあっただのではなく、むしろ「さかしら心」に対する「真心」、人間の自由な感情が容認される社会の構築にあったのではないかと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

「言語研究においては師弟の意見を取り入れるなど柔軟な姿勢を見せつつも、一方で儒学を批判する時は相手を全く受け入れない頑なな態度をとる」宣長、あるいは「多くの文献を引用して「実証的」に『古事記』を研究したにも関わらず、その成果である、いわゆる「古道論」を展開するときは、詩的に古代を語り出す」宣長は、長く宣長研究者にとって悩みの種であった。宣長学の本質は、果たしてその「文献学」的実証主義にあるのか、非合理的「古道論」にあるのか、多くの論争がなされてきた。加藤周一の「宣長問題」といった表現も、この宣長学研究者の苦悩の吐露であった。

ただし最近では（1980年以降）、流れが変わり、宣長学の本質はその非合理的「古道論」の方にあるとする考え方が、優勢になってきている。宣長研究が国民国家（ナショナリズム）批判の文脈に組み入れられる形になったからだ。「文献学は宣長の場合、手段・方法に過ぎず、目的は自身が証明しているように、わが国の道として神道を究明することであった」（城福勇）との理解が、ほぼ一般化するにいたっている。

しかし筆者はこの最近の流れに二つの点で疑問を呈する。

一つは、宣長学の本質が、その一見非合理的に見える「古道論」にあったとしても、ではそれは子安宣邦氏らが指摘するように、単に宣長の「皇国主義」、「日本中心主義」のイデオロギー的表現だろうか。古道の強調は単なる排外的ナショナリズムの表白だろうかとの疑問である。

そして今一つは、では「古道論」を紡ぎ出すのに、宣長はなぜ『源氏物語』や『古事記』の「文献学」的研究を必要としたのだろうか、実証という手法を必要としたのだろうか、それが解けていないではないかとの疑問である。そこで筆者は、宣長「古道論」のバイブルでもあり、同時に彼の実証的「文献学」研究のお手本でもある『古事記伝』の分析から、そのいただいた疑問の答えを見出そうとする。そして一つの重要な発見に到達する。

アメツチノハジメノトキ　タカアノハラニナリマセルカミノミナハ　アメノミナカスシノカミ　ツギニクカミムスビノカミ　ツギニカミムスビノカミ　コノミバシラノ
天地初発之時。於高天原成神名。天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱
カミ　ハ　ミナヒトリガミナリマシテ　ミミラクシタマヒキ　ツギニクニワカクウキアブラノゴトクニシテ　クラゲナスダダヨヘルノトキニ
神者。並独成坐而。隱身也。次国稚如浮脂而。久羅下那洲多陀用幣琉之時。
アシカビノゴトモエアガルモノヨリテナリマセルカミノミナハ　ウマシアシカビヒコデノカミ　ツギニアメノトコタチノカミ　コノフタハシラノカミモヒトリガミナリマシテ
如葦牙因萌騰之物而成神名。宇麻志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神。此二柱神亦独神成坐而。
ミミラクシタマヒキ　カミノクダリイツバシラノカミハコトアマツカミ
隱身也。上件五柱神者別天神。

これは『古事記』冒頭の一節だが、天と地の誕生を「天地初発之時」の出来事とはせずに
ツギニクニワカクウキアブラノゴトクニシテ　クラゲナスダダヨヘルノトキニ
「次国稚如浮脂而。久羅下那洲多陀用幣琉之時。」の出来事とすることによって、天地以前に天之御

中主神・高御産巢日神・神産巢日神の3神が誕生していたことにし、天地さえその3神の作り物であるかのように言う。これが『古事記伝』による『古事記』解釈の、典型的な事例だということを発見する。そしてそこから『古事記伝』が、この世に存在するあらゆるものを、善きものであれ、悪しきものであれ、すべて神（善神・悪神）の創造物とみなすために行われた『古事記』の注釈書であったとの結論に至る。

宣長は、けっしてとらわれなき「文献学」の実証主義者ではなかったのである。彼の「文献学」には明らかに、最初からそこに到達すべき結論があった。従って、宣長学をイデオロギーとして捉えるのは、それ自体は正しい。

これがまず筆者の到達した最初の結論である。『古事記伝』の分析としては卓越している。

では宣長の「古道論」は、排外主義的（反中国）ナショナリズムの表白かということ、それは筆者は首肯しない。であれば次のような宣長の学問論は成立しないからである。「この国では、漢籍について学ぶことが「学問」と呼ばれてきたが、自国の事柄を学ぶことこそ本来「学問」と呼ばれなければならない。漢学は異国の学問であるから自国の学問とは区別して「漢学」と呼ぶべきである」との。宣長は決して「漢学」は否定していないのである。ただ「漢学」を「学問」といい、自国の事柄を学ぶことを「学問」と呼ばない、学問のあり方を批判しているだけなのである。

宣長がなぜ「古道」をいい「聖人の道」を否定したのか。

「聖人の道」（儒学）とは、そもそも人間社会の原点を禽獣同様の社会、従って誰か優れた人が人為的に「道」を定めないかぎり安定しない社会と捉えることを前提にした、人（聖人）によって作爲された「道」のことである。しかも人間社会の原点が禽獣同様の社会であることは、古今東西同じであるから、それは普遍的な——中国でも通じるし、日本でも通じる——「道」ということになる。だから「道」を神の作爲の所産と考える宣長にとって、儒学は許し難い学問に映ったのである。口を極めて「聖人の道」＝儒学を批判したのである。聖人のことを「権謀術数に長けた策略家」とまでいったのである。

ちなみに筆者は、第二章と第四章において、宣長の儒学批判が、実は「聖人の道」の人為性に対する批判であり、古代を禽獣同様の社会と見なす、その歴史認識に対する批判であったことを、儒学者市川鶴鳴と宣長との論争を手がかりに、丹念に跡づけている。儒学・国学論争に新しい光をあてる、優れた研究として評価できる。

だから逆に、宣長の激しい儒学批判をもって宣長を排外主義的ナショナリストと決めつけるわけにはいかないのである。彼は「漢学」だから「聖人の道」を否定したわけではない、それが人為的な「道」の学だから、それを否定しただけであった。これも優れた発見というべきだろう。

ではなぜ、宣長は「道」を人為的なものでなく、比喩的な言い方になるが神為的なものと捉えたのだろうか。そもそも彼には、『古事記』研究——「古道」研究——を行う前に、文学研究、言語研究

の実績があり、そこで、儒仏的勧善懲悪主義にとらわれない、人のあるがままを認める「もののあはれ」の感情こそ、人の最も尊重すべき感情だとの結論に到達していたからであった。さらには係り結びの法則を研究することによって、優れた言語は現代にあるのではなく、古代にあったことを発見するに至っていたからであった。

ということは、宣長は人の「もののあはれ」の感情を許容しうる「道」のあり方を、儒仏的勧善懲悪主義の外にさがす模索する必要にかられていた。だから彼は「道」の神為性に到達したのである。「道」が神為であれば、「道」は人にとって推し量り難いものになる。それが理不尽であろうと何であろうと、ただ従うしかないものになる。ならば逆に人は自らの行動と「道」との対応関係（因果応報的關係）から解き放たれ、「もののあはれ」の感情にまかせて生きることができるようになるからである。

かくて、筆者は、宣長「古道論」の作為性を、その排外主義からではなく、文学論・言語論から説明することに成功したのである。「宣長問題」を指摘した加藤周一氏や、宣長学の中に近代ナショナリズムの萌芽を見出した子安宣邦氏らとは、異なった宣長解釈の次元にたつことに成功したといえる。

確かに、ではなぜ18世紀という時代に以上のような文学論・言語論に端を発する宣長学が成立したのかという最大の問いに対しては筆者は答えていない。しかし大きすぎる命題への解答留保は本研究の価値を決しておとしめるものではない。

以上の理由から、本審査委員会は、本申請論文が奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を備えているものと判断する。